

## 青森県農協中央会会長賞

### くりご飯

合浦小学校（青森市）

六年 工藤愛理

秋。少し寒くなってきたころのことだ。私のおばあちゃんは、よくかぼちゃのにつけを作る。しかし、私にとっては苦手な食べ物だ。私は、かぼちゃやくり、卵の黄身といった菌にくつつき、ねっとりしている食材が苦手なのだ。だから、くりご飯も今までは食べなかった。

「あれ。なんかいいにおいがする。」

私は、いいにおいにつられて二階から家族が集まる一階に降りていった。

「くりをもらってきたから、くりご飯を作ったよ。」

とおばあちゃんが言った。

「ああ、くりか。」

と言って、私は考えた。

「くりは苦手なんだよな。」

でも、いいにおいに負けて一口食べてみた。丸くて、やわらかくてほくほくのくり。黄色がかった少し甘いご飯。くりの甘いにおいが鼻に残った。

「くりご飯ってこんな味だったんだ。」

私はびっくりした。くりご飯が意外にもおいしすぎたのだ。

「おばあちゃん、くりご飯おいしいね。」

私は言った。苦手なはずなのに、はしが止まらなかった。ご飯にくりの味が入って甘いからか、どこか優しい感じがした。甘いくりは、口の中でほろっとくずれた。ほくほくしていて、口の中でいつまでも味が残っていた。

「私は、どうして今まで食べてこなかったんだろう。」

不思議な気持ちになった。

「くり食べられるようになったの。」

おばあちゃんはびっくりして言った。

しかし、くりは食べられるようになったが、まだかぼちゃや卵の黄身は苦手だ。なぜだろう。くりご飯は大好きに変わったのに。それは、きつとごはんのおかげだ。

私は、くりのねっとりとした食感が苦手だった。しかし、ごはんはくりのねっとり合せて甘さを引き出させてくれる。そして、ご飯はくりを目立たせていた。ごはんはくりと相性がよいのだ。

自分でもこんなにおいしいとは思わなかった。

「ちょっと自分に腹が立つなあ。」

私は自分で味を決めていて、食わずぎらいで食べなかった自分に後悔の気持ちといらだちの気持ちがこってきた。でも、こう思っていたからこそ、くりご飯のおいしさが身にしてみたのだ。

「食わずぎらいをしないで、何でもチャレンジして食べなきゃだめなんだ。」

このくりご飯はそのことを私に教えてくれた。次は、おばあちゃん手作りのかぼちゃのにつけにもチャレンジしていきたい。